２　病害虫発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 14 作物に被害を与える 176 病害虫の発生消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病害虫の生態、気象の経過と予報等を基に、病害虫の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病害虫の的確な防除を推進した。

（１）対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
普通作物	水　稲	いもち病、紋枯病、白葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、縞葉枯病、稲こうじ病、 ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、 斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、ホソハリカメムシトゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）、 フタオビコヤガ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ、スクミリンゴガイ	イチモンジセセリ（イネツトムシ）
	麦	うどんこ病、赤かび病、さび病類（コムギ赤さび病、オオムギ黄さび病、オオムギ小さび病、オオムギ黒さび病）	黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、黒節病、縞萎縮病、オオムギ斑葉病、 アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、 ムギダニ、シロトビムシ類
	かんしょ	基腐病、 ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ	つる割病、立枯病、 イモキバガ（イモコガ）、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
普通作物	大　豆	紫斑病、 アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ	ウイルス病、立枯性病害、葉焼病、べと病、茎疫病 コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、食葉性チョウ目幼虫、シロイチモジマダラメイガ、ダイズサヤタマバエ、ウコンノメイガ
果樹等作物	な　し	黒斑病、黒星病、赤星病、 シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、 カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、 アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）、 ニセナシサビダニ、 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）	うどんこ病、輪紋病
	茶	炭疽病、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、 チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、 ハダニ類（カンザワハダニ）、 アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、 カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ）、 チャトゲコナジラミ	もち病、輪斑病 カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、 ヨモギエダシャク、マダラカサハラハムシ、チュウゴクアミガサハゴロモ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、うどんこ病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ） オオタバコガ、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	青枯病、萎ちょう病類、 ハモグリバエ類、
	な　す	うどんこ病、灰色かび病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、 オオタバコガ、ハスモンヨトウ、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）	褐紋病、褐色腐敗病、半身萎ちょう病、青枯病、 ハモグリバエ類、ホコリダニ類
	きゅうり	べと病、炭疽病、うどんこ病、斑点細菌病、灰色かび病、褐斑病 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 ハダニ類（ナミハダニ）、 アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ	モザイク病、菌核病、黄化えそ病、退緑黄化病、 ハモグリバエ類、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
野菜	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハイマダラノメイガ
	ね　ぎ	さび病、黒斑病、べと病 ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ネギハモグリバエ、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、ネギコガ	萎縮病、小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、葉枯病、黒腐菌核病
	さといも	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、 ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、 ハスモンヨトウ	べと病、立枯病、シロオビノメイガ、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ
	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、 ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 オオタバコガ	萎黄病、輪斑病、 ホコリダニ類
小　　計		14 作物、106 病害虫	14 作物、70 病害虫
合　　計		14 作物、176 病害虫	

（注1）「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病害虫。

（注2）「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病害虫。

（２） 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア　県予察ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野　　菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ　地区予察ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
果樹特産	な　し	2	上里町長浜、春日部市内牧
計		2	

ウ　予察灯設置ほ場

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲	6	川越市南田島、川島町上八ツ林　本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な　し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

（注）（　）書きのある予察灯は、（　）内の機関が調査している予察ほ場である。

エ　巡回調査地域

区　　分	対象作物	箇 所 数	ほ　　場　　所　　在　　地
普通作物	水　稲 （早植）	8	川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、 熊谷市中曽根、加須市麦倉、加須市大越、春日部市樋籠 幸手市神扇
	水　稲 （普通植）	6	坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、吉川市中井、 本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田
	麦 （大麦）	2	熊谷市平塚新田、白岡市太田新井
	麦 （小麦）	9	川越市古谷上、坂戸市片柳、嵐山町志賀、 本庄市児玉町吉田林、熊谷市今井、熊谷市樋春、 行田市前谷、加須市大越、蓮田市駒崎
	かんしょ	2	川越市中台南、三芳町上富
	大　豆	6	川越市古谷上、嵐山町杉山、熊谷市板井、熊谷市樋春、 加須市大越、蓮田市駒崎
果樹特産	な　し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市上種足、 加須市鴻茎、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、 日高市森戸新田
野　菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市仁手、 上里町勅使河原、深谷市宿根、加須市栄、越谷市東町
	な　す	3	本庄市児玉町小平、熊谷市小江川、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町上大屋敷、本庄市田中、 熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市大室
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市針ヶ谷、吉川市川藤
	ね　ぎ	5	本庄市田中、深谷市下手計、熊谷市上中条、 白岡市上野田、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市上手計
	いちご	5	吉見町荒子（苗）・江和井（本ぽ）、本庄市台町、 加須市本郷、春日部市内牧、久喜市菖蒲町菖蒲
計		80	

（注）水稲（早植）：5月中旬までの移植、水稲（普通植）：5月下旬以降の移植。

オ　フェロモントラップ等調査

対象作物	対象害虫名	箇 所 数	設　　置　　場　　所
水　稲	ニカメイガ	3	熊谷市中曽根、加須市麦倉、幸手市神扇
	フタオビコヤガ	3	川島町下大屋敷、熊谷市中曽根、加須市戸室
大　豆	マメシンクイガ	1	加須市大越
な　し	ナシヒメシンクイ	6	飯能市双柳、鴻巣市常光、上里町長浜、 加須市鴻茎、春日部市内牧、久喜市六万部
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野　菜	オオタバコガ	6	本庄市児玉町小平、深谷市針ヶ谷、 加須市大越、越谷市中島、杉戸町大塚、 白岡市上野田
	ハスモンヨトウ	4	熊谷市樋春、深谷市針ヶ谷、加須市大越、 久喜市菖蒲町菖蒲
	コナガ	1	深谷市新戒
	シロイチモジヨトウ	4	深谷市新戒、加須市大越、白岡市上野田、 杉戸町大塚
計		34	

（3）令和７年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア　主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年：早 前年：並	平年：並 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なかったが、一部感受性品種で発生が見られた。この作型では平年の発生量が比較的少ないため、発生量は平年並となった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。発生量は平年並だった。	8月の降水量は少なく、顕著な高温だったため、軽微な発生にとどまった。この作型では平年の発生量が少ないため、発生量は平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	7～8月の気温がかなり高かったが、降水量は少なかったため、発生量はやや少となった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：多 前年：並	平年よりやや遅い8月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	本作型では過去10年で一昨年から軽微な発生が見られており、本年も昨年並の発生量だったが、平年比は多となった。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年：早 前年：やや早	平年：多 前年：やや多	平年より早い6月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年より多かった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は平年より低かったが、麦ほ場における生息密度が過去10年で2番目に高かったため、平年より早く多い発生となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつある一方で、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ごま葉枯病	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	平年より早い7月第6半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	高温で肥切れが早く感染しやすい状況にあったが、長期の高温で病原菌の活動も抑制されたため、限定的な発生にとどまった。平年の発生量が極めて少ないため、平年比多となった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	この作型では秋耕が定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年は少発生傾向である。本年はフェロモントラップの誘殺数が平年より少なく、本田での発生は確認されなかった。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年：やや早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年よりやや早い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本田での初発生は早かったが、予察灯への誘殺数は平年より少なかった。セジロウンカの飛来数が少なく、あまり本田に定着しなかったため、発生量が平年よりやや少なくなったと推察される。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	予察灯への誘殺は若干見られたものの、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメトビウンカ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年よりやや早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の顕著な高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量は並にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年：やや遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年よりやや遅い6月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる顕著な高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：少	平年並の6月第2半旬に初発生を確認し、発生量は6月に最大となった。発生量は平年並だった。	7月中旬実施の畦畔・雑草地における県内一斉調査では、1調査地点当たりの発生量が過去10年で最も多かった。昨年イネカメムシが多発生し、越冬量も多かったが、イネカメムシ対策として各地で広域防除が実施されたことから、発生量は平年並にとどまった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報、イネカメムシ越冬状況調査結果を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	夏期の長期にわたる顕著な高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや多 前年：－	平年よりやや遅い6月第2半旬に初発生を確認したが、その後発生は見られなかった。	フェロモントラップの誘殺数は年々減少傾向にあり、ほ場での発生も減少している。平年の発生量が少ないため、少発生1か所で平年比やや多となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：多	平年並の5月第2半旬に初発生を確認し、発生量は6月に最大となった。発生量は平年並だった。	近年発生量は減少傾向にあり、予察灯誘殺数も平年よりも少なかったが、本田では複数地域で発生が確認されたため、発生量は平年並となった。	越冬場所（森林、堤防沿い）に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	本作型では、地域による被害の多少の差が大きかったが、発生量は平年よりやや少なく、前年並かやや少なかった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。常発地の防除が徹底されて、発生量は平年よりやや少なくなった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネドロオイムシ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	本虫は寒冷地型であり、本県では4月下旬移植の一部地域でわずかに発生が見られる程度である。本年発生は確認されなかった。	常発地域が非常に限定的であり、当該地域では育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：多	平年よりやや早い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なく、夏期の異常高温により7月16日を最後に9月21日まで感染好適日が出現しなかった。一部感受性品種での発生が見られたため、発生量は平年並となった。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月が最大となった。発生量は平年並だった。	葉いもちの発生量が平年並だったため、穂いもちの発生量も平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：多	平年より遅い7月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は平年並だった。	8月～9月の気温がかなり高く、降水量は少なかった。顕著な高温で病原菌の生育適温を超える時間帯が長く、多発には至らなかった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	平年の発生量が非常に少ないため、一部で散発程度の発生であっても、平年比は多となった。	温湯消毒の実施と箱育苗処理剤の励行を実施。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年並あった。	初発は平年より早かったが、本作型の出穂期である8月の降水量は少なく、夏期の顕著な高温少雨で発生が抑制された可能性が否定できない。平年の発生量が少ないため、散発程度の発生でも平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8～9月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	本作型では、一部地域を除きほぼ抵抗性品種となっている。また、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は平年より低く、ヒメトビウンカの本田での発生量は平年並であったため、本病の発生はやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を作付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本作型の穂ばらみ期～出穂期の降水量が少なく、顕著な高温少雨が続いたため、発生が抑制された可能性が否定できない。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ごま葉枯病	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年より多かった。	顕著な高温で病原菌の活動が抑制されたが、高温で肥切れが早く感染に好適な条件となった一部地域では、発生が多かった。平年の発生量は少ないため、平年比多となった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	平年より早い7月第4半旬に初発生を確認したものの、発生は散発にとどまった。本年は一部地域で予察灯誘殺数が平年より多かったが、本田での発生量は平年並であった。	本作型では米麦二毛作が多く、米収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。散発1か所で平年並の発生となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：やや少	平年より遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は平年並だった。	本田の初発生は遅く、予察灯への誘殺も平年より遅く、誘殺数も少なかった。8月7日に飛来予測があったため、本作型の地域では平年並の発生となった。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	本田での発生は確認されなかったが、予察灯への誘殺は県内複数地域で確認された。	飛来予測日数は昨年と同じであったが、1回当たりの飛来数が少なかったため、ほとんどの地域で本田定着には至らなかったと考えられる。平年の発生量が少ないため、無発生が平年並となる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測通知により飛来予測日数を集計している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：多	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量は平年並となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年：やや遅 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	一部地域で予察灯への誘殺数が平年より多く、その地域で本田での発生量が多かったため、全体の発生量は平年比やや多となった。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	昨年イネカメムシが多発生し、7月に予察灯誘殺数が急増した。7月に注意報を2回発表し、防除圧が高まったため、8月以降はほとんど誘殺されなかった。防除が不十分な一部ほ場では発生量が多く、本田では平年比やや多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い7月第6半旬に初発生を確認し、その後も発生は確認されたが、一部地域での散発程度の発生に留まった。発生量は平年並だった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制された(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)。平年の発生量が少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	平年の発生量が非常に少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年：やや遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年よりやや遅い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は9～10月に最大となった。	平年の発生量は非常に少ないが、一部地域（多肥栽培の晩生品種）で発生量が多く、平年比多となった。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年：やや早 前年：並	平年：並 前年：多	平年よりやや早い6月第3半旬に一部の地域で初発生を確認し、その後7月まで発生は継続した。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。散発程度であったが、平年並の発生となった。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生量は平年並だったが、ごく一部に被害程度の大きいほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。地域による被害の多少の差が大きく、全体での発生量は平年並となった。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネドロオイムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	特に防除はしていないが、普及している箱施用剤には、コウチュウ目に有効なものもある。
麦	黒さび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	赤さび病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第4半旬に初発生を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	4月中下旬が温暖多湿に経過し、感染しやすい条件が継続したが、赤かび病の防除が徹底されたため、平年比やや少となった。	赤かび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	小さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い3月第5半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年並だった。	3月下旬が温暖に経過したため、平年より発生時期が早まった。昨年の発生量はやや少なく、菌密度が低かったため、発生量は平年並となった。	赤かび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い5月第2半旬に初発生を確認した。発生量は平年並だった。	4月下旬～5月上中旬に温暖多湿条件が継続し、アメダスデータから算出される赤かび病子のう胞子飛散好適日と小麦の開花期が完全に一致した。注意報を発表し、追加防除を呼びかけたことで、平年並の発生となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。 注意報を発表し、追加防除を呼びかけた。
麦	黒穂病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い1月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は3～5月に最大となった。発生量は平年並だった。	3～4月に高温多雨傾向で推移したため、発生が助長された。発生は一部地域のみだったため、平年並となった。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入により発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
麦	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年より早い12月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年並だった。	暖冬傾向であったため、初発は平年より早まったものの、3月下旬にまとまった降雨があったため、発生は平年並にとどまった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
麦	ムギダニ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	－
かんしょ	つる割病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	基腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ （イモコガ）	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年：早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	6月第1半旬に初発が確認された。その後も継続して発生が見られたが、前年ほどの発生量にはならなった。また、適切な防除により被害はそれほど拡大しなかった。	夏期に顕著な高温乾燥条件になったために発生が抑制されたと考えられる。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本害虫は極端な高温に対して弱く、本年度の6～9月の気温は本種にとってマイナス要因として働いていた可能性が高い。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年：遅い 前年：遅	平年：多 前年：－	9月第1半旬に初発が確認され、シロイチモジヨトウやオオタバコガなどが優占して発生していた。防除により大きな被害にはならなかった。	本年度に発生したチョウ目幼虫として、シロイチモジヨトウとオオタバコガがおり、この2種は本年度のような異常な高温・乾燥条件でも発生が増加していた。かんしょにおいても例外ではなく、防除が行われるまでは幼虫が数多く発生していた。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
大豆	紫斑病	平年：やや遅 前年：遅	平年：並 前年：少	収穫期の子実調査において、ほぼ全地域で散発程度の発生が確認された。	9月上旬にまとまった降雨があったため、莢伸長期の感染を助長したが、「里のほほえみ」は本病への強い抵抗性を持つため、発生は平年並にとどまった。	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：並	一部地域で散発程度の発生が確認された。	連作に伴い、一部地域にて発生した。	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年：遅 前年：やや遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。感染しやすい生育ステージである8月の降雨が少なく、夏期の顕著な高温少雨で抑制され、平年並となった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年：やや遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年並だった。	8～10月は高温傾向が続いたが、降雨が少なかったため、発生は平年並となった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で褐斑粒の発生が確認された。生育期のモザイク葉は確認されなかった。	アブラムシ類の発生は確認できなかったが、褐斑粒が1か所で少発生(被害粒率4.7%)、1か所で散発となった。平年の発生量が少ないため、平年比多となる。	－
大豆	茎疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	平成30年以降は発生量が減少しているため、無発生でも平年比は少にならない。	は種時の薬剤処理と適期防除を実施している。
大豆	コガネムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	発生が確認されなかった原因は定かではないが、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	他の食葉性チョウ目幼虫と一括して調査を行っていたため、個別データをとっていない。	同左	同左
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より早い7月第5半旬から発生が確認され、発生面積は9～10月に最大となった。シロイチモジヨトウ、オオタバコガが多かったが、９月からハスモンヨトウも多くなった。発生量は平年より多かった。	オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数は、9月～10月の高温少雨傾向により、9～10月にかけて平年より大幅に増加し、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。 オオタバコガとシロイチモジヨトウは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い9月第6半旬に、一部地域で成虫が確認された。発生量は平年並であった。	大規模粗放栽培のほとんど防除を行っていない調査地点1か所が子実調査で多発生となったが、他の調査地点は散発1か所のみで、平年並の発生となった。9～10月の高温少雨により、第2世代幼虫の被害が発生したと考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダラメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で被害が確認された。発生量は平年並だった。	ほ場での発生は確認できなかったが、子実調査で少発生が2か所、散発が1か所確認された。8～10月は高温少雨で経過したが、発生は平年並にとどまった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	吸実性カメムシ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	近年、他種カメムシ類の寄生が減少する9月中旬から収穫期近くまで寄生するミナミアオカメムシが急速に増加し、9月～10月まで高温で推移したため、子実被害が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	ウコンノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒星病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：少	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認したが、9月以降は発生が確認されなかった。発生量は平年並で前年より少なかった。	前年秋の発生量が少なかったため発生が遅く、少雨により前年より発生が少なくなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い4月第6半旬に初発を確認した。その後7月にピークとなり、発生量は前年より多く、平年並であった。	3月から5月に降雨が多かったことから発生時期が早かったが、その後降水量が少なく推移したため、平年並となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認し、10月に平年よりやや多い発生量となった。	6月から8月の少雨、日照時間が多かったことにより発生時期が遅くなったが、9月に入り着果負担の大きい時期に少雨で助長され平年よりやや多い発生となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	シンクイムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	フェロモントラップでは平年並の3月第4半旬から成虫が誘殺されているが、梨園内では発生は確認されなかった。	－	フェロモントラップデータの公表により、注意喚起を呼びかけた。
なし	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い6月第3半旬に初発を確認した。その後8月に多発生となり、9月にピークとなって平年比やや多となった。	6月から9月にかけての高温・少雨により発生が助長され平年よりやや多く発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	アブラムシ類	平年：やや早 前年：早	平年：並 前年：多	平年よりやや早い4月第2半旬に初発を確認した。発生量は平年並であった。	3月・4月の気温が高かったことから、発生時期が早まった。その後の防除で平年並に抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ニセナシサビダニ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い7月第3半旬に初発を確認した。平年並の発生量となった。	7月の高温時に発生が見られたが、通常の防除で平年並に抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	果樹カメムシ類	平年：－ 前年：早	平年：並 前年：少	梨園内では前年より早い6月第3半旬に果実被害が確認されたが、発生量は平年並（過去にほとんど発生がない）であった。	予察灯では、5月第3半旬から誘殺数の増加傾向が見られたが、多目的防災網の普及により被害は限定的と考えられた。	フェロモントラップ及び予察灯データの公表により、注意喚起を呼びかけた。
茶	炭そ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：多	二番茶摘採以降、6月第4半旬から7月第1半旬にかけて発生が見られた。広い地域での発生が見られたものの、7月中旬以降は発生を確認できなかった。	7月以降の顕著な高温乾燥により、本病害の好適条件にならず、発生が大きく抑えられたものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	－
茶	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	2月第3半旬にごくわずかに発生が確認されたものの、発生地域も限定的でありそれ以降の確認もできなった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	－
茶	チャノコカクモンハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや少	フェロモントラップでの調査では、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月上旬以降減少し、昨年同様第2世代成虫の誘殺数は平年を大きく下回った。幼虫は、8月第6半旬と11月上旬にわずかに発生が見られたものの、昨年よりもさらに発生が少なかった。	本種も夏の異常高温・乾燥の影響を受けたものと考えられる。また、適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年並であった。発生量は地点にも依るが、おおむね平年より少なかった。 幼虫は、茶園での発生時期は平年並であった。8月第1半旬以降は発生量は減少し、その後も茶園での幼虫の発生はほとんど確認されなかった。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の異常な高温・乾燥の影響で発生が抑えられたものと考えられる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノホソガ	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫は平年よりも早かった。発生量は8月上旬以降減少し、9月以降は発生がほとんど確認されなかった。 幼虫は、初夏にわずかに一部の茶園での発生が確認された。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の異常な高温・乾燥の影響で発生が抑えられたものと考えられる。特に本種はチャハマキ、チャノコカクモンハマキと比べても、高温に弱い傾向があるため強く発生が抑制されたと考えられた。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第4半旬から発生が確認され、7月第4半旬までは平年並の発生状況が続いていた。その後8月以降は発生量が減少した。	夏期の高温乾燥の影響のため、2番茶の摘採以降発生量が緩やかに増加した。しかし、県内で8月以降40度を超える異常な高温の日が連続した影響により、発生が抑制されたと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
茶	カンザワハダニ	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い4月第4半旬から発生は見られたものの、その後局地的に小規模な発生は確認されたものの、発生量が大きく増加することはなかった。	局地的に発生量が増加したものの。深刈りにより、物理的に除去されたほか、9月以降の適切な防除により発生は抑えられた。また、本種も異常な高温の影響で摘採面に留まることが難しかったものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第4半旬から発生が見られる園が増えたが、その後発生量自体は大きく増加することはなかった。	梅雨入りが早まった影響により、平年よりも発生が遅れたが、カンザワハダニとの同時防除により発生はある程度抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ツマグロアオカスミカメ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生が確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。また、本年の県内における発生は非常に局所的かつ小規模となっている。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	クワシロカイガラムシ	平年：遅 前年：－	平年：やや少 前年：－	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月6日（平年より20日早い）、第2世代は7月16日（平年より7日早い）、第3世代は9月23日（平年より23日遅い）となった。	冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少している。夏期の異常高温により発育上限温度に連日到達していたため、第3世代の発生に抑制されたものと考えられる。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ヨモギエダシャク	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生が確認されなかった。	本県での発生は少なく、チャのハマキガ類と同時に適切な防除がされていると思われる。	－
茶	チャトゲコナジラミ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	裾葉に定着していたが、チャの栽培上問題のない程度の発生にとどまっていた。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	－
茶	マダラカサハラハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	昨年発生したほ場において、8月第6半旬から、9月第2半旬にかけてゲリラ的な食害が確認された。	突然発生して食害が見られるため、対策が難しい。局所的な発生にとどまっているため、県内での被害はそれほど大きくなっていない。	本年度より、新しく県の指定有害動植物に登録されたため、調査を開始した。
茶	チュウゴクアミガサハゴロモ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	調査が開始された2月第1半旬から産卵されたチャ枝がすべてのほ場に存在しており、4月第3半旬以降幼虫の発生が広く確認された。また、7月第3半旬以降と9月第6半旬に成虫によるチャ枝への産卵がすべてのほ場で確認された。	秋や春の刈り落としにより、発生量はある程度抑えられているものの、産卵自体は多く行われていた。産卵は1番茶の摘採時期には確認されなかったため、現状では大きな被害にはつながっていない。	本年度より、新しく県の指定有害動植物に登録されたため、調査を開始した。発生予察情報や病害虫防除情報等の防除指導により、物理的防除を推進した。
冬春トマト（長期一作）	疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	灰色かび病	平年：並 前年：－	平年：やや少 前年：多	1月第4半旬に初発を確認し発生量は少なかったが、その後4月第2半旬で増加し、全体的な発生量は平年よりやや少なくなった。	1月上旬に降水量が多く、発生が確認されたもののその後降雨は少なく抑えられていた。3月4月の降雨で発生量が増加したが、限定的な発生であった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト（長期一作）	葉かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種の普及により発生は抑制されている。	抵抗性品種の導入とあわせ薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト（長期一作）	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。また、土壌消毒が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	黄化葉巻病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い10月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場でウイルス媒介虫の侵入防止対策が不十分であったため、発生が増加した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。一部ほ場で耐病性品種が導入されている。
冬春トマト（長期一作）	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認後、2月3月で収束したが、収穫終盤となった5月中旬に発生量が増加したため、発生量は平年よりもやや多くなった。	気温が上がってきた時期に乾燥状態となった施設内で増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	萎ちょう病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種が広く普及している。	土壌病害に共通した土壌消毒等の対策がとられている。
冬春トマト（長期一作）	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト（長期一作）	コナジラミ類	平年：早 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より早い9月第6半旬に初発を確認し、発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。また、3～4月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト（長期一作）	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い11月第4半旬に初発を確認し、発生が継続したが、発生量が少なかったため、平年並となった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト（長期一作）	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い5月第4半旬に初発を確認しすぐに収束したが、平年の発生量が少ないため多となった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト（長期一作）	オオタバコガ	平年：－ 前年：遅	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	うどんこ病	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	9月に着果負担の影響と激しい雨の後の高温などの条件で発生したと考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い8月第1半旬で初発を確認したが、少発生であったため、すぐに収束した。	7月から8月は高温乾燥が顕著であったが、局所的に一時的な雷雨もあり、場所によって多湿条件になったものと考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐紋病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐色腐敗病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：少	平年よりも遅い8月第1半旬に初発が確認されたが、発生は少なく、すぐに終息したため、発生量は平年並となった。	－	－
夏秋なす	半身萎ちょう病	平年：早 前年：遅	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い6月第4半旬に初発を確認し、一部ほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	アザミウマ類	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	6～9月の高温により、発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：やや多	平年より遅い6第4半旬に初発を確認し、その後継続的に発生が続いたため、発生量は平年より多くなった。	6～9月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認したが、9月に入り気温が下がってから増加し、多発生となった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認したが、その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	－	－
夏秋なす	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認後、継続的に発生し、発生量は平年並となった。	発生は継続したが防除対策により平年並となった。	－
夏秋なす	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い6月第6半旬に初発を確認した。その後、発生は抑えられたが9月、10月で再び増加した。発生量は平年よりやや少なかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：やや多	平年並の8月第3半旬に初発を確認した。9月まで継続して発生したため、発生量は平年より多くなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認した。その後、作期の終了する11月まで発生は増加したが、多発生にはならず、発生量は平年より少なかった。	9月及び10月は降雨があり、ハウス内湿度が上昇したのと、着果負担があったため発生したが、防除により少発生で抑えられた。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	炭疽病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い10月第3半旬に初発を確認し、その後11月の収穫終盤まで増加したが、発生量は平年並であった。	－	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が作期終盤まで続いたが、発生量は平年よりやや少なかった。	9月以降の降水量は少なく、防除対策を講じたため、発生は抑えられた。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	作付前の太陽熱消毒等により伝染源である菌核の死滅が図られている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりやや遅い9月第4半旬に初発を確認し、その後11月まで発生は継続し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、発生が助長された。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い9月第4半旬に初発を確認し、その後発生が増加し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認し、その後発生は継続・増加し、発生量は平年よりやや少なかった。	9～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、発生量は増加していったため、発生量は平年より多くなった。	8～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が多く継続し、発生量は平年並となった。	9～11月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年：遅 前年：－	平年：やや多 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、中発生で平年よりやや多かった。	10月及び11月の降雨が少なく、乾燥していたため収穫終盤で発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、その後増加し、発生量は平年より多かった。	一部施設で発生が確認されたが、気温が高かったため発生が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い8月第6半旬に主にシロイチモジヨトウの初発を確認し、発生量は平年並であった。	野外から施設への侵入があったものと考えられるが、その後の防除で抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：多	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認後に増加し、発生量は平年より多かった。	3～4月に降雨が多く、ハウス内湿度が上がりやすい状態になり、発生量が増加した。	抵抗性品種の導入と、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。また、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	炭疽病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い3月第5半旬に初発を確認したが、発生量はそれほど多くなくすぐに終息したため、発生量は平年より少なかった。	一部定植時期の早いハウスで成り疲れして発生したものの、適正な湿度管理や適期防除が行われ、発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年よりやや遅い1月第6半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	－	抵抗性品種が導入されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い1月第6半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は一部で少発生であり、発生量は平年並となった。	－	作付後の太陽熱利用等による土壌消毒を行っている。
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は限定的で少発生かつすぐに終息したため、発生量は平年並であった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に感染株の抜き取りが行われ、発生は一時的なものとなった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い3月第5半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部で発生量も少なかったため、発生量は平よりやや少なかった。	3～4月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、感染が5月まで続いたが、発生量は少なく限定的で、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年：早 前年：－	平年：やや少 前年：多	平年より早い2月第3半旬に初発を確認し、作期終盤まで発生量は少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：並	平年より早い1月第5半旬に初発を確認し、その後作期終盤まで発生量は増加したため、発生量は平年より多くなった。	3～5月の高温によりハウスへの飛込みが増え、収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場で発生が助長された。	施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：－	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認、多発生となったが、すぐに終息した。発生量は平年より多かった。	4～5月の高温が助長原因と考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い5月第1半旬に初発を確認したが、少発生ですぐに終息した。発生量は平年並であった。	4～5月の高温が助長原因と考えられる。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
ブロッコリー	黒腐病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	べと病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認したが、少発生ですぐに終息した。発生量は平年並であった。	－	育苗時からの防除対策が行われている。
ブロッコリー	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒すす病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：少	平年と同時期の9月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年並だった。	生育初期は、育苗・定植時に処理した薬剤による防除効果が続いていたが、9月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。10月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	7月～10月の高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。9月10月の2回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並であった。	7月～10月に高温により発生が助長され、フェロモントラップの誘殺数も平年より多かったが、適切な防除によりほ場での発生が平年並に抑えられた。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月9月10月の3回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	さび病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い6月第5半旬に初発を確認したがその後終息したため、発生量はやや少となった。	一時的な降雨で感染する条件となったが、その後高温乾燥が続いたため、終息したと考えられる。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：並	平年並の6月第5半旬に初発を確認し、その後発生が継続した。発生量は平年並であった。	一時的な降雨により発生が助長された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	白絹病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	土壌消毒と併せ、耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い9月第4半旬に初発を確認した。その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	9月以降の高温により発生が助長された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。10月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より早い6月第6半旬に初発を確認した。その後も継続して発生が確認され、発生量は平年並であった。	5月～11月の高温により発生が助長され、12月まで発生が確認された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月9月10月の3回、注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認したがその後はすぐに終息した。発生量は平年並であった。	5月の高温で発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	平年よりも早い6月第5半旬に初発を確認し、継続して発生が確認された。発生量は、平年並だった。	6月～10月の高温により発生が助長された。B系統の発生はそれほど多くなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、栽培期間を通じて継続して発生が見られ、10月がピークとなった。発生量は平年よりやや多かった。	一年を通して高温で推移したため、発生が早く、長く続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	汚斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	疫病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。また、栽培期間は顕著な高温乾燥が続いており、発生が大きく抑制された。	県内主要産地での防除に対する意識が高く、適期防除が行われ、発生は抑制された。ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：やや少	平年より遅い6月第3半旬に初発が確認され、9月まで発生が見られたが、発生量は増えなかった。	顕著な高温乾燥の影響で灌水終了後の地上部の枯死が早く発生が終息した。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：少	9月第3半旬に初発が確認されたが、発生圃場は限定的で、その後発生は見られず発生量は平年並となった。	顕著な高温乾燥の影響で灌水終了後の地上部の枯死が早く発生が終息した。	－
冬春ほうれんそう	べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い1月第3半旬に初発が確認されたが、一部のほ場でありすぐ終息したため平年並となった。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	平年は確認されていないが、10月第6半旬の初発を確認し、多発せず終息した。	9月～11月にかけて気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、本年はシロイチモジヨトウが食害の主体であり、本種の発生は確認されなかった。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご（育苗期）	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご（育苗期）	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご（育苗期）	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご（育苗期）	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご（育苗期）	輪斑病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い5月第3半旬に初発を確認したが、発生ほ場は限定的で少発生であったため、発生量は平年よりやや少なかった。	－	－
いちご（育苗期）	ハスモンヨトウ	平年：やや遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年よりやや遅い6月第6半旬で初発を確認したが、発生ほ場は限定的であったため、発生量は平年並となった。	－	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	アザミウマ類	平年：－ 前年：早	平年：－ 前年：－	平年はほぼ確認されていないが、5月第4半旬に初発を確認し、発生量は少なく、その後の発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご（育苗期）	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し多発生となり、その後は発生量は抑えられたが、発生量は平年より多くなった。	4月の気温が高く、5月からの発生が見られたが、薬剤防除が行われ、発生は抑制された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご（育苗期）	ハダニ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認されたが、発生量は平年並となった。	4月の気温が高く、5月からの発生が見られ、その後の高温で8月まで発生が続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご（育苗期）	コナジラミ類	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い5月第3半旬に初発を確認したが、その後も断続的に少発生を確認した。発生量は平年並となった。	適切な防除により少発生にとどまり、被害はなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご （育苗期）	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	育苗期の気温が高く発生の懸念があったが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	灰色かび病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い12月第3半旬に初発を確認した。その後の発生はなかったが、4月に再び発生した。発生量は平年よりやや少となった。	1月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：－	平年より遅い3月第6半旬に初発を確認した。発生量は平年よりやや多かった。	適切な肥培管理や適期防除により、３月中旬まで発生が抑えられたが、施設内の乾燥により助長され、収穫期で防除が難しい時期に発生量が多くなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご （生育･収穫期）	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認した。その後発生量は増え11月にピークとなり、平年比やや多となった。	10～11月の高温の影響により、被覆展張遅れのほか側窓や出入口を開放して換気していた影響により、飛び込みによる発生が多かったと見られた。	ハウス開口部のネット使用により成虫の飛び込みを抑え、発生動向を見ながら薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い10月第2半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量はやや少となった。	9月～12月にかけて高温で推移したため、一部ほ場で飛び込みによる発生が確認されたが、防除により平年よりやや少で抑えられた。	ハウス開口部の赤色ネット使用により野外からの飛び込みを抑える耕種的防除と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認され、2月3月の発生量が増加した。作期を通じた発生量は平年並となった。	2月及び3月の気温が平年よりかなり高かかため、野外からの飛び込みとハウス内で増殖により増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご （生育･収穫期）	ハダニ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：やや多	平年より早い10月第2半旬に初発を確認した。その後も継続的に発生が確認され、3月がピークとなったが、発生量は平年より少なかった。	苗からの持ち込みと考えられる初発は早かったものの、防除の徹底により11月～12月は発生がやや少なかった。2月から3月にかけて気温が高かった時期に増加が見られたが、平年比やや少で収まった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。定植前のC02ガス処理や、天敵の利用も進んでいる。
いちご （生育･収穫期）	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	11月、12月に一部のほ場で少発生が見られたが、すぐに収まり限定的であった。	－	－

イ 令和7年度 病害虫発生程度別及び防除面積

※「0」は単位に満たないもの

作物名（作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 13,320ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					－		
	苗いもち					－		
	葉いもち	0	8	197	2140	2345	6235	6235
	穂いもち				9	9	100	100
	紋枯病	0	8	197	2140	2345	10300	10300
	白葉枯病					－		
	ばか苗病					－	6235	6235
	イネシンガレセンチュウ					－		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					－	10300	10300
	もみ枯細菌病				9	9		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					－	10300	10300
	ごま葉枯病			9	787	796		
	小粒菌核病					－		
	黄化萎縮病					－		
	縞葉枯病	256	671	1570	2924	5421	6235	6235
	黒すじ萎縮病					－		
	萎縮病					－		
	黄萎病					－		
	稲こうじ病					－	10300	10300
	褐色菌核病					－		
	赤色菌核病					－		
	葉しょう褐変病					－		
	褐色葉枯病					－		
	苗立枯細菌病					－		
	ニカメイガ					－	6235	6235
	セジロウンカ		2	62	1190	1254	6235	6235
	トビイロウンカ					－	6235	6235
	ヒメトビウンカ	4091	6559	2477	190	13317	6235	6235
	ツマグロヨコバイ	2	33	321	1895	2251	6235	6235
	イネハモグリバエ					－		
	イネミギワバエ					－		
	イネキモグリバエ					－		
	イネドロオイムシ					－	6235	6235
	イネゾウムシ					－		
	イネクロカメムシ					－		
	斑点米カメムシ類		23	1124	7054	8201	5150	10300
	イチモンジセセリ				9	9	6235	6235
	フタオビコヤガ			1	272	273	6235	6235
	イネヨトウ					－		
	アワヨトウ					－		
	コブノメイガ					－	6235	6235
	イネミズゾウムシ			9	787	796	6235	6235
	スクミリンゴガイ					－	30	30
普通期水稲 16,280ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					－		
	苗いもち					－		
	葉いもち	0	6	200	2538	2744	12500	12500
	穂いもち		0	23	960	983	12500	12500
	紋枯病	201	633	1668	3447	5949	12500	12500
	白葉枯病					－		
	ばか苗病				169	169	6250	6250
	イネシンガレセンチュウ					－		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					－	12500	12500
	もみ枯細菌病				169	169		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					－	12500	12500
	ごま葉枯病	65	271	910	2471	3717		
	小粒菌核病					－		
	黄化萎縮病					－		
	縞葉枯病		0	23	960	983	12500	12500
	黒すじ萎縮病					－		
	萎縮病					－		
	黄萎病					－		
	稲こうじ病					－	12500	12500

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稲 （5月下旬以降の移植）	褐色菌核病					－		
	赤色菌核病					－		
	葉しょう褐変病					－		
	褐色葉枯病					－		
	苗立枯細菌病					－		
	ニカメイガ				34	34	12500	12500
	セジロウンカ	1	31	474	3323	3829	12500	12500
	トビイロウンカ					－	12500	12500
	ヒメトビウンカ	4221	10457	1591	10	16279	12500	12500
	ツマグロヨコバイ	1101	1228	1921	2788	7038	12500	12500
	イネハモグリバエ					－		
	イネミギワバエ					－		
	イネキモグリバエ					－		
	イネドロオイムシ					－		
	イネゾウムシ					－		
	イネクロカメムシ					－		
	斑点米カメムシ類	1127	1313	2065	2961	7466	12500	25000
	イチモンジセセリ				169	169	12500	12500
	フタオビコヤガ				34	34	12500	12500
	イネヨトウ					－		
	アワヨトウ					－		
	コブノメイガ	64	271	910	2471	3716	12500	12500
	イネミズゾウムシ				169	169	12500	12500
	スクミリンゴガイ					－	30	30
麦 6,528ha	黒さび病					－		
	赤さび病			1	211	212	1300	1300
	黄さび病					－		
	小さび病					－		
	うどんこ病	1	17	203	1257	1478	1950	1950
	赤かび病			1	639	640	1950	1950
	雪腐病類					－		
	黒穂病類					－		
	黒節病	1	11	106	692	810	650	650
	麦類縞萎縮病					－		
	小麦縞萎縮病					－		
	大麦縞萎縮病					－		
	雲形病					－		
	斑葉病					－		
	株腐病					－		
	立枯病					－		
	アブラムシ類			5	656	661	1300	1300
	ムギアカタマバエ					－		
	ハモグリバエ類					－		
	ムギダニ					－	650	650
かんしょ 365ha	かいよう病					－		
	つる割病					－	50	50
	立枯病					－	50	50
	イモキバガ					－		
	ナカジロシタバ		0	6	100	106	300	300
	ハスモンヨトウ					－	300	300
	シロイチモジヨトウ					－		
	ヨツモンカメノコハムシ					－		
	コガネムシ類					－	150	200
	その他（食葉性チョウ目幼虫）			183	183	366	300	300
大豆 667ha	紫斑病			1	67	68		
	さび病					－		
	菌核病					－		
	立枯性病害			1	1	2	370	370
	炭そ病					－		
	黒とう病					－		
	べと病				367	367	370	370
	葉焼病			14	448	462	370	370
	モザイク病					－		

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					－		
	ウイルス病(わい化病除く)			1	39	40		
	わい化病					－		
	アブラムシ類					－		
	タネバエ					－		
	コガネムシ類					－	370	370
	ハスモンヨトウ					－	370	740
	食葉性チョウ目幼虫	132	246	210	70	658	370	740
	ハダニ類					－		
	ダイズサヤタマバエ					－	370	370
	マメヒメサヤムシガ					－		
	マメシンクイガ	3	13	43	112	171	370	370
	シロイチモジマダラメイガ		0	9	90	99	370	370
	吸実性カメムシ類	39	120	213	198	570	370	740
	ウコンノメイガ					－		
	フタスジヒメハムシ					－		
	ヒメサヤムシ類					－	370	370
なし	黒斑病					－		
336ha	黒星病				0	－	325	325
	赤星病			0	25	25	325	650
	うどんこ病	45	45	60	70	220	325	650
	輪紋病					－	325	650
	ナシヒメシンクイ					－	325	975
	モモシンクイガ					－		
	ナシマダラメイガ					－		
	ハマキムシ類					－	325	975
	ハダニ類	21	59	103	99	282	325	975
	カメムシ類				0	－	325	975
	カイガラムシ類					－	325	325
	アブラムシ類	4	10	28	60	102	325	325
	ニセナシサビダニ				0	－	325	325
	吸ガ類					－		
	ナシチビガ					－		
茶	炭疽病	0	3	27	132	162	710	1420
726ha	もち病					－		
	網もち病					－		
	輪斑病					－	710	1420
	チャノコカクモンハマキ				5	5	710	2130
	チャハマキ		0	4	62	66	710	2130
	チャノホソガ				5	5	710	2130
	チャノミドリヒメヨコバイ		0	48	475	523	710	2130
	カンザワハダニ		0	5	103	108	710	2130
	チャノキイロアザミウマ		0	48	475	523	710	2130
	ツマグロアオカスミカメ					－		
	クワシロカイガラムシ	2	9	38	115	164	710	1420
	ヨモギエダシャク					－	710	710
	チャトゲコナジラミ	2	11	45	136	194	710	1420
冬春トマト	疫病					－		
112ha	灰色かび病				1	1	110	330
	モザイク病					－		
	葉かび病					－		
	青枯病					－		
	萎ちょう病					－		
	うどんこ病	1	4	12	26	43	110	330
	黄化葉巻病	0	2	7	21	30	110	330
	アザミウマ類					－	110	330
	オオタバコガ					－	110	110
	コナジラミ類	0	2	7	21	30	110	330
	ハモグリバエ類					－	110	110
	アブラムシ類					－	110	110
	トマトサビダニ					－		
	ハスモンヨトウ					－	110	110

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす	うどんこ病				3	3	180	540
	灰色かび病				3	3		
229ha	褐紋病					－	180	180
	褐色腐敗病				3	3	180	540
	半身萎ちょう病	28	25	35	43	131	160	160
	青枯病					－	160	160
	アザミウマ類	30	30	40	47	147	180	720
	コナジラミ類	0	2	15	55	72	180	540
	オオタバコガ	51	29	34	37	151	180	540
	ハモグリバエ類	2	7	19	41	69	180	180
	アブラムシ類		0	5	29	34	180	540
	ハダニ類	2	7	19	41	69	180	720
	ハスモンヨトウ	15	21	34	48	118	180	540
	ホコリダニ類	28	20	26	33	107	180	720
夏秋きゅうり	べと病			0	23	23	280	280
317ha	炭そ病					－		
	疫病					－		
	うどんこ病	0	1	11	52	64	280	280
	斑点細菌病					－		
	モザイク病					－		
	灰色かび病					－		
	褐斑病			0	9	9	280	280
	菌核病					－		
	黄化えそ病		0	7	54	61	280	560
	退緑黄化病	9	20	43	73	145	280	560
	アザミウマ類				2	2	280	560
	ハダニ類			0	9	9	280	280
	アブラムシ類					－		
	コナジラミ類			1	65	66	280	560
	ハモグリバエ類			0	14	14	280	560
	ワタヘリクロノメイガ					－		
	オオタバコガ					－		
	ハスモンヨトウ		0	3	30	33	280	280
	食葉性チョウ目幼虫				0	－	280	280
冬春きゅうり	べと病	9	21	43	65	138	240	720
245ha	炭疽病					－		
	疫病					－		
	うどんこ病				7	7	240	720
	斑点細菌病					－		
	モザイク病					－		
	灰色かび病					－	240	720
	褐斑病		0	2	22	24	240	720
	菌核病				0	－		
	黄化えそ病				0	－		
	退緑黄化病				2	2		
	アザミウマ類				2	2	240	720
	ハダニ類		0	5	32	37	240	720
	アブラムシ類			0	15	15	240	720
	コナジラミ類				2	2	240	720
	ハモグリバエ類	0	2	10	34	46	240	720
	ワタヘリクロノメイガ					－		
	オオタバコガ					－		
	ハスモンヨトウ					－		
	食葉性チョウ目幼虫					－	240	240

作物名 （作付面積）	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー	黒腐病					－		
1,202ha	べと病				17	17		
	アブラムシ類					－	1000	1000
	コナガ					－	1000	1000
	ハスモンヨトウ				17	17	1000	1000
秋冬ねぎ	さび病				6	6	930	2790
1,590ha	黒斑病	0	8	71	344	423	930	2790
	萎縮病					－		
	べと病					－	930	2790
	軟腐病					－	930	930
	白絹病					－	930	930
	シロイチモジヨトウ	232	319	410	366	1327	930	2790
	ハスモンヨトウ	1	8	50	215	274	930	2790
	アブラムシ類				6	6	930	930
	ネギハモグリバエ					－		
	ネギアザミウマ	0	8	71	344	423	930	2790
	ネギコガ	269	676	524	114	1583	930	2790
さといも	汚斑病					－		
721ha	モザイク病					－		
	疫病					－	300	300
	アブラムシ類	16	74	189	254	533	300	300
	ハダニ類					－	300	300
	ハスモンヨトウ				36	36	300	300
ほうれんそう	べと病					－	1700	1700
1,718ha	立枯病					－		
	アブラムシ類				24	24	200	200
	ハスモンヨトウ					－	200	200
	ヨトウガ					－	200	200
	ケナガコナダニ					－	200	200
	シロオビノメイガ					－	200	200
いちご	灰色かび病				1	1	95	190
95ha	うどんこ病	0	1	4	15	20	95	190
	モザイク病					－		
	炭疽病					－	95	190
	萎黄病				0	－	95	95
	アブラムシ類		0	2	16	18	95	190
	アザミウマ類	6	7	12	17	42	95	285
	コナジラミ類				1	1	95	95
	ハダニ類	0	1	6	20	27	95	285
	ハスモンヨトウ			0	11	11	95	95
	チョウ目害虫				1	1	95	95

（４）令和７年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア　病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

（ア）警　報

なし

（イ）注意報

発表年月日	内容
令和 7年 5月16日	ムギ類、赤かび病
令和 7年 7月 3日	イネ、イネカメムシ
令和 7年 7月23日	イネ、イネカメムシ
令和 7年 7月29日	イネ、斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ）
令和 7年 8月22日	ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ
令和 7年 9月1日	ダイズ・野菜類・花き類、オオタバコガ
令和 7年 9月22日	ネギ・ダイズ、ブロッコリー・その他野菜類、シロイチモジヨトウ
令和 7年10月 9日	植木類・チャ・果樹類・宿根アスター等、チュウゴクアミガサハゴロモ
令和 7年10月27日	野菜類・花き類、チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

（ウ）特殊報

発表年月日	内容
令和 7年 5月19日	キウイフルーツかいよう病（Psa３系統）の発生について
令和 7年 9月 5日	ナスこうがい毛かび病の発生について
令和 8年 1月19日	*Alternaria japonica* Yoshii によるブロッコリー黒すす症状の発生について

（エ）発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和 7年 4月24日	11月	令和 7年10月28 日
6月	令和 7年 5月30 日	12月	令和 7年11月26日
7月	令和 7年 6月26日	1月	令和 7年12月23日
8月	令和 7年 7月30日	2月	令和 8年 1月27日
9月	令和 7年 8月26日	3月	令和 8年 2月27日
10月	令和 7年 9月25日	4月	令和 8年 3月23日

（オ）注意を促すための情報

a　病害虫防除情報

発表無し

b　調査結果等

病害虫の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発 表 時 期	内　　容
令和７年 ４月～ 令和８年３月	各種フェロモントラップ等データ
令和７年 ５月 30 日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和７年 6～8 月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和７年 6～7 月	気象予測データによるウンカ類飛来予測状況 （トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和７年 ７月 23 日	いもち病発生状況調査結果
令和７年 ７月 23 日	水稲の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和８年 １月 16 日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和８年 ３月 19 日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果
令和８年 ３月 26 日	イネカメムシ越冬状況調査結果

c　注意喚起・啓発資料

農業者の他、一般県民に対しても病害虫に対する注意喚起や対策を呼び掛ける啓発資料を作成し、ホームページに掲載するとともに紙媒体での配布を行った。

発表年月日	作物別	内　　容
令和７年 ７月 28 日	果樹・茶樹・植木類・花き等	チュウゴクアミガサハゴロモが各地で多発しています
令和７年 11 月 13 日	果樹・茶樹・植木類・花き等	チュウゴクアミガサハゴロモが各地で多発しています

イ　発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報等）、病害虫発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスであるＪＰＰ－ＮＥＴ（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病害虫防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。